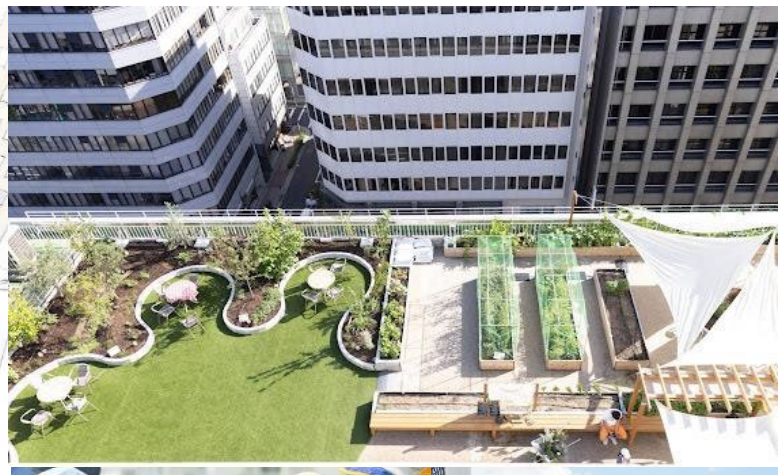
Edible KAYABAEN project



取組の位置

地域課題・目的

【地域課題】

中央区の地域課題

・共同住宅（マンション）に暮らす世帯の割合が90%で23区内1位、緑被率は23区内最下位の23位

▶多くの住民がマンション住まい、緑豊かな屋外空間が非常に少ない。持続可能な都市緑化の提案が必要

・フルタイム共働き世帯54.5%、6歳未満の子どもがいる家庭の97.1%が核家族、親に代わって子どもを見てくれる人がいない世帯28.7%、学童クラブ待機率25.8%

▶共働きの核家族世帯割合が高く、子どもたちの自宅・学校以外の居場所のニーズが高いが対応しきれていない
緑豊かな屋外公園の不足、COVID―19の影響もあり交流の機会が失われている状態

・合計特殊出生率23区内1位、人口の急増（2016年14万人→2022年17万人）、不登校率中学生4.53%（全国3.94%）

▶人口急増に伴うコミュニティの希薄化が進み、場所の提供と共にコミュニティの担い手が必要とされている

【目的】

▶マンションやビルが多いエリアで屋上を利用した食べられる都市緑化のモデルを作り持続可能な緑豊かな街づくりを実現
▶子育てを家族の中で完結させるのではなく、地域で担い、子どもを中心に親同士、地域がつながり合うコミュニティを形成
▶ビルの屋上菜園で「食と農」という学びを通じ、持続可能な未来に向けて、生きる力を育む人材育成を実施

取組内容

Edible KAYABAENのオープンとプログラムの実施

日本橋茅場町において、食農体験を通した誰もが繋がりができる場、楽しめる場、食卓を囲める場、教育が受けられる場、そして居場所をもてる場となるようEdible(=食べられる)KAYABA(=茅場町)EN(=えん：円、縁、宴、園)という名前にその想いを込めて計画・施工。中央区の課題解決や目指すまちづくりに沿った、環境整備とプログラムの提供、コミュニティの形成を行っています。

育・食・学ルーフトップガーデン

果樹やハーブが楽しめるフォレストガーデン、様々な野菜や果物の収穫が楽しめるファーム、採れたての野菜をみんなで調理するキッチン、生ゴミなどを堆肥化するコンポスト、ナイトシネマなどイベントを楽しむステージなど“学びあうガーデン&キッチン”を計画し既存ビルの屋上に施工。

人が集まるエディブルガーデン

200種以上の豊かな食べられる自然の中で、ガーデンの豊かな資源を使用しボーダレスに人と人、人と緑がつながる地域のコミュニティガーデンとして利用。また、パーマカルチャーデザイナーの フィル・キャッシュマン氏とともに、コミュニティづくりへの取組や持続可能な農業を学ぶコミュニティプログラムを実践。

自然学校「アーススコーレ」

（年内実施予定）

エディブル・スクールヤード・ジャパンによる自然学校「アーススコーレ」を開校。彼らの実践するエディブル・エデュケーションは、食を通してどう生きるかを体験的に学ぶ持続可能な社会に貢献する教育メソッド。

取組効果

■新たな緑化公園スペースの創出

約600㎡の食べられる緑化空間を計画し
アーバンファーミングを実践することで
都市のアメニティ向上に寄与

■中央区の子供たちの新たな食の学びと居場所づくりへの貢献

2022年5月からスタートした計3回の食農体験イベントに100名以上の子どもたちが参加し収穫や料理を体験

■地域のコミュニティ形成の場の創出

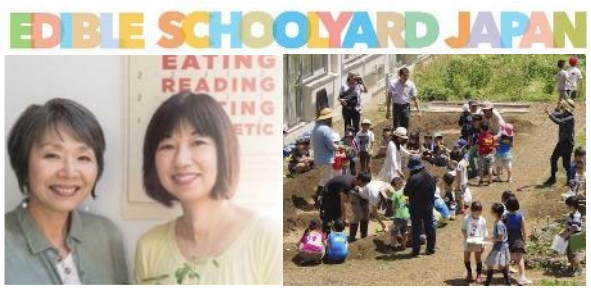
日本橋エリアの地域団体（日本橋七の部連合町会、日本橋パパの会）とオープンガーデンイベントを実施し町のシンボルとなるような場づくりについての意見交換会を実施

工夫した点

校庭菜園から始まった「食育」革命『エディブルスクールヤード』との協働

「すべての子どもたちに学校菜園を」を合言葉に活動するエディブル・スクールヤード・ジャパンと共に食育菜園を計画。菜園を学びの場（教室）に変え、子どもたちのこころと手（体）、頭（考える）をつなぎ食を通じて自然界といのちのつながりを体験的に学ぶエディブル教育を本PJに取り込みました。

エディブル・スクールヤード・ジャパン　プロフィール
一般社団法人エディブル・スクールヤード・ジャパン（ESYJ）は、カリフォルニア州バークレーを拠点に、全米、および世界の教育機関とネットワークするThe Edible Schoolyard Projectの日本における窓口として承認された唯一の機関



エディブル・スクールヤード・ジャパン　（左／代表 堀口博子　右／共同代表 西村和代）

パーマカルチャーの先導者、フィル・キャッシュマン氏のデザイン

計画スタート時からパーマカルチャー（持続可能な農業と文化）の専門家であるフィル・キャッシュマン氏とこの場の目指す未来、それを実現する空間のデザイン、場の活用方法まで、共に検討を進めました。それにより、チームビルディングの段階から課題に対して本質的なデザインとプログラムを計画しました。

フィル・キャッシュマン氏プロフィール
パーマカルチャーの提唱者、ビル・モリソン氏にオーストラリアのメルボルンで直接指導を受け日本に戻ってから神奈川県葉山町で実践と研究を重ねパーマカルチャーの専門家として日本各地で活躍

パーマカルチャーデザイナー　フィル・キャッシュマン氏

「誰もが“居場所”を持てる街を目指した再開発でビルの屋上を活用

本PJは、「日本橋茅場町・兜町再活性プロジェクト」の一環としてうまれました。渋沢栄一がこの地に銀行・証券の礎を築いて150年。投資と成長を金融だけでなく未来を担う子どもたちにも、と考え計画しました。また中央区の課題である緑あるまちづくりに貢献する目的で、ユニバーサル園芸社と共に、ビルの屋上を食べられる庭に変化させました。

今後期待される効果

教育機関との協働

教育として「食と農」へ投資する社会にしていくには感覚値だけでなくエビデンスが重要。また都市部の自然の不足、コロナ禍の影響もあり子どもたちへの精神的影響は大きく深刻化。ガーデンセラピーという手段で都市部の健やかなライフスタイル構築に向け教育機関との協働を企図。

地域外の皆さま

活動に共感し支援したいと思ってくださる方との関わり

地域飲食店との連携

店舗ででた飲食ゴミをガーデン内のコンポストにより堆肥化し再活用。またFARM TO TABLEイベントの共同開催。

地元小学校との連携

地元小学校と協働し、授業の一貫としての「食育菜園」体験の提供

地域企業の皆さまとの協働

近隣企業の活動支援による必要資材の提供や福利厚生としてのプログラム提供

町会、地域団体とのコミュニティ形成

地域の住民団体との協働によるコミュニティ醸成

今後の展望

都市の学べる&食べられる緑化のモデルガーデンへ

Edible KAYABAENは始まったばかりの、可能性に溢れたガーデンです。そして場のデザイン、そして場活用においてパーマカルチャーやエディブル教育の内容を踏まえてつくられました。ハード＋ソフト両面において今後のアーバンファーミングや教育としての屋上菜園の利用におけるモデルとなるガーデンになる場所です。まずはこの地で、エリアの皆さんを巻き込み子どもたちを中心に誰もがつながれる場づくりを行っていきます。